

第5回「万葉集・明日香村」を中心とした授業づくりセミナー 概要報告

大西 浩明

- ◇日時 2023年1月28日(土) 10:00~12:00
◇場所 県立万葉文化館
◇参加者 【現職教員】村上(平城小)、平井(桜井中)
【学生】川田(3回生)、後川(3回生)、東(2回生)
【万葉文化館】井上
【大学教員】加藤、米田、大西 計9名

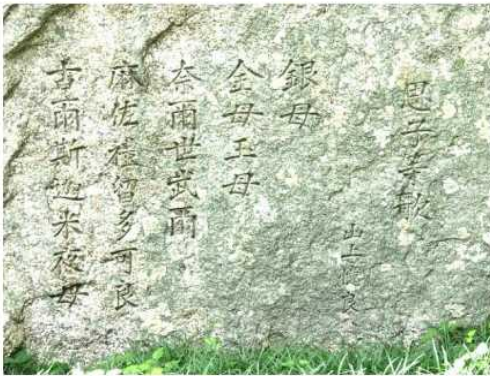
◇内容 学習指導案の検討

(1) 中学校3年 国語科「いにしへの歌に仮託して自分の思いを伝えよう」

国語教育専修 川田大登さん

【授業概要】

三木町立三木中学校3年生を想定



思子等歌(子等を思う歌)
山上憶良
銀母(しろかねも)
金母玉母(くがねも たまも)
奈爾世武爾(なにせむに)
麻佐禮留多可良(まされるたから)
古爾斯迦米夜母(こにしかめやも)
(銀も金も宝石も何になろうか。
子どもという宝に勝るものは
ないのだ)

昭和44年3月、一人の本校卒業生がバス事故に遭い、18歳で亡くなりました。大学入試を受けるために、たまたま乗車したバスの事故でした。本校に在籍当時吹奏楽部に籍を置き、卒業後も後輩指導によく来てくれていた彼女の訃報に、生徒・職員は深く悲しまました。しかしながら、誰よりも悲しまれたのは、ご両親をはじめ、家族の方々です。「子どもを失う悲しさ、子どもを愛おしく思う親の気持ちを、どうか子どもたちに伝えてほしい」・・・お父様からの強い願いでした。併せて、寄付金をいただき「交通安全祈願の万葉歌碑」とすることになったのです。碑文は、万葉集の中で唯一「子を思う親の歌」と言われる、山上憶良の歌。あえて万葉仮名の表記にして、万葉の時代から変わらぬ親の思いを子どもたちに伝えたいと考えました。石は、墓石を想像させる花崗岩は避けて三木町の山から採石し、文字は当時の妹尾勤一町長にお願いしました。初めは東門北側に設置して、登下校時に目につくようにと配慮しましたが、校舎増築のため、メタセコイアの庭にイチョウの木と共に移転。行きかう子どもたちを見守るように設置されています。

(三木中学校創立60周年記念誌「心はぐくむ緑の校庭一石碑めぐり」より)

生徒は石碑があることを知っていても、何の石碑か知る子どもはほとんどいない。職員も。漢字ばかりなので読もうとする子どももいない。

校庭の万葉歌碑、「子を思う歌」と出会い、和歌には詠まれた背景や思いがあり、三木中の関係者にもその和歌に自分の思いを託した人たちがいることを知る。

→ 万葉仮名を学び、解説する。 現在の漢字かな交じりの表記方法には有限性がある
歌碑が置かれた背景を調べ、設置者がこの和歌に自分の思いを託していたことを知る。

複数の万葉歌をその作品に含まれた思いを考えながら鑑賞する。

それぞれの歌に込められた作者の思いに迫る

「自分の万葉歌碑を立てよう」

- ・最も自分が共感したり、考えを持ったりした和歌を選ぶ
- ・その歌碑を置きたい場所を探し、写真を撮る
- ・置きたい場所の画像に歌碑を挿入し、万葉歌碑をつくり、自分がその歌碑に託した思いを書く
- ・お互いの歌碑やそれに託された思いを読んで、感想をもつ

【意見交流】

- ・導入は、石碑を見せて「この謎の石碑は何だろう？」からでいい。
- ・わざわざ万葉仮名で書かれているのはなぜなのかを考えさせたい。
看板でもいいのに、なぜ石碑にしたのか、万葉集なのか、そこにある遺族の思いに迫りたい。
- ・思いを理解して自分に落とし込むことで自分事化が図れると思う。
- ・万葉集の歌を子どもが調べる際、どれだけ調べられるかが課題。
→ 指導者があえて絞るのではなく、子どもに選ばせたい
井上先生の本（マンガ）を全員に配って各自がそれを読んで、そこから選ぶといいのでは。
- ・デジタルでバーチャルの歌碑をつくるという発想がいい。
→ だからこそ恋の歌があっていい。中学生でもこういうときはきちんとするものだと思う。
- ・歌碑を立てる場所の風景を写真に撮る…どういう風景にするか、きちんと歌の解釈をしないと。
写真は「映像言語」であり、行間を読むことと同じ。
- ・万葉仮名と歌の解釈は密着しているという研究成果がある。
単にその音を当てはめているのではなく、意味があってその音の漢字を使っている。
- ・学習後に、もう一度この石碑を建てた家族らの思いに戻って考えてほしい。
そのことで、「伝えていかななくては！」という生徒の思いを喚起できるのではないか。

(2) 中学校3年 国語科・音楽科「オリジナルの和歌を作ろう～万葉集から想いを馳せて～」

音楽教育専修3回生 後川りのさん

【授業概要】

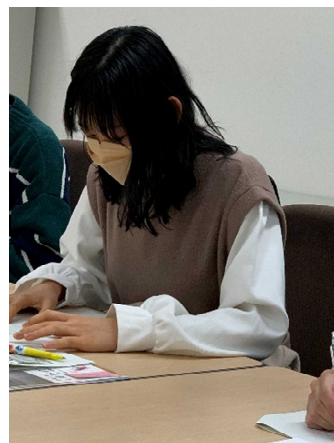
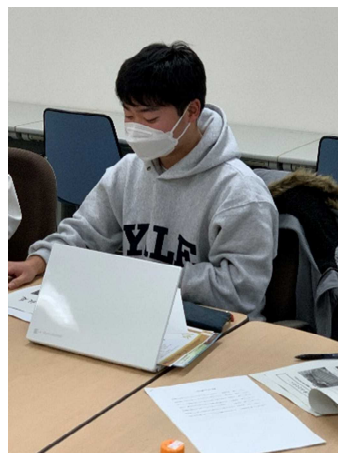
天台声明とグレゴリア聖歌を聴くことから、日本と西洋の音楽の起源を知り、声以外に音が無いことに注目させる。

→ 「声だけ」という視点から、和歌も同じであること、言葉は文字ではなく音声だということに気づかせる。

新井満さんの和歌を繋げた歌を聴いたり、木下龍也さんの動画を視聴したりすることで、和歌を書く人の想いを感じ取る。

万葉歌碑データベースより各々が気になる和歌を選び、その意味・背景を予想させ、そこからイメージできる音を付ける。

万葉歌碑データベースから気に入った一節を引用し、ペアで上の句・下の句を分けて作る。



完成した和歌を発表し、その和歌を作っていないペアに音を付けてもらう。

【意見交流】

- ・万葉集は歌われていたものというであることを理解できる授業になる。
「かけ言葉」で同じ音を繰り返す歌が結構あるので、そういうものを紹介すると昔は歌われていたことが分かりやすい。
- ・二人で上の句、下の句と分けてやるのではなく、共同で一つの歌をつくる方がいいのでは。
- ・一から歌をつくるのは難しいが、万葉集の一節を使うのはいいと思う。
- ・最初は同じ一つの歌にみんなで音をつけるといいのでは。
→ その心象風景を表す歌や曲を探すというのでもいい。(クラシックでも、J-POPでも)
- ・万葉文化館に、実際に万葉集がどのように歌われていたかという音源があるので活用できる。
- ・音声読み上げソフトなどを使えば、考えた音がデータとして残る。
何もないと分からなくなってしまう可能性があるのでは。
- ・歌の解釈をしっかりとやる必要がある。
→ 短調、長調、リズム、テンポなど、大きく変わってくる。
それを聞き合って、互いに意見を交わすことで学びが深まるのでは。
そう考えると、あまり多くの歌を選ぶのではなく、いくつかにしぼった方がいいのでは。

